地方医学校の設立と廃校

―その一、大阪慈恵病院医学校―

中山　沃

大阪府病院を貧窮民のための施療病院とする計画に失敗した緒方惟準らは、同志の医師や府民の資金をもとにして、大阪慈恵病院を設立し、貧窮民の施療を行うことになった。明治二十一年（一八八八）六月二十一日、大阪市東区唐物町一丁目円光寺内に開院した。やがて東区北久太郎町一丁目の浪華尋常小学校跡を購入し、移転し、同年十二月十五日開院式を行った。この病院に内務省の医師開業試験を受験して医師になる医学生を養成するための医学校を併設することになった。明治二十六年十二月初旬、前期、後期生徒各五十名を募集した。そして同月十一日北区今井町の共立薬学校を仮校舎として授業を開始した。開校時の講師及び講義課目は次のようであった。

化学	陸軍二等薬剤官	飯島信吉
物理学	陸軍三等薬剤官	佐藤鉥次
解剖学	陸軍二等軍医	林桂次郎
解剖学	ドクトル	堀内謙吉
生理学		中原貞衛
薬物学、内科学	陸軍一等軍医	高橋辰五郎
内科通論、内科各論	医学士	山田秀治
眼科学、臨床講義	医学士	村田豊作
婦人科学、産科学、臨床講義	ドクトル	緒方収二郎
法医学、診断学	医学士	緒方正清
外科通論、内科各論、臨床講義	陸軍一等軍医	江口　襄
その他各科手術傍観、産科模型演習、顕微鏡的病変標示、屍体外科手術演習、病体解剖などは各専門受持講師が担当した。		木村　恕

しかし明治二十七年（一八九四）二月、清国と開戦するに及び、講師の軍医は不在あるいは多忙のため講義をすることができなくなったため、外科各論と臨床実験を緒方収二郎、外科総論を緒方正清が兼任することとなっ

た。

これより先、明治二十七年一月十五日東区粉川町一丁目の官有地七三〇坪を借用、同年九月病院および医学校の新築工事に着手、同二十八年十月落成、開院・開校式を挙行した。生徒数は百人内外であった。

明治二十九年一月の『中外医事新報』の報ずるところによれば、校長緒方惟準、幹事山田俊卿、宮内重志、講師岩崎勘次、堀内謙吉、緒方収二郎、緒方太郎、緒方正清、緒方銈次郎、鬼束益三、菅野虎太、久保郁蔵、増田正心、松山正、小林亀松で、不在中の講師は飯島信吉、中原貞衛、村田豊作、江口襄の軍関係者である。同年末には教授法を改良し、さらに松本需一郎、和田彦一郎が新たに講師陣に加わった。修業年限を三年とし、前期一年半で前期学科を、後期一年半で後期学科を教授した。そして前期卒業生は医術開業前期試験（物理学、化学、解剖学、生理学）に、後期卒業生は同後期試験（薬物学、内科学、外科学、眼科学、産科学）に合格する学力をつけることを目標とした。そして前・後期各五十名を募集し、同年十二月一日から講義を始めている。実際の入学者は合計百名を若干越えていた。新たに講師となった人達の担当科目は次のようであった。

無機、有機化学	小林亀松
物理学	岩崎勘次
生理学	増本真二郎
薬物学、処方学	増田正心
内科総論、外科総論	増田正心
内科各論	緒方銈次郎
内科臨床講、診断学	鬼束益三
外科各論	増本真二郎

明治三十一年頃同医学校は何故か、とかく不振で、医学生の失望も少なくなかった。そこで改正を行い、緒方惟準、緒方収二郎の両氏を顧門に推し、緒方正清を校長として、熟練した講師を招聘、増員し、規則を改め、十一月から開講したところ、生徒も日毎に増加し、次第に隆盛になる徴候を見せ始めた。

一方同校では現在及び旧存の教師、生徒の親睦を結び、かつ学術の研究をする目的で同校内で集会を行った。この会を「校友会」と称し、明治二十九年一月十二日第一回校

友会を開催した。演題は次のようであった。

一　子宮外妊娠の診断　　緒方正清
二　脂肪附属及び脂肪変性を論ず　　緒方銈次郎
三　医学修業経歴談　　山田俊卿
四　開業医薬品鑑別法　　岩崎勘次

明治三十年四月十一日僧を招き同病院で施餓鬼供養を行っているが、この日まで同医学校では三十有余人の遺体解剖を行っている。

なお同医学校が何時廃校になったかは現在までの調査では不明である。

大正十四年の医籍録による調査によれば同医学校に学んだ医師は関西出身が最も多く、そのほか中国、四国地方の出身がこれにつぎ、総計三十七名の姓名が判明した。

（岡山大学医学部）

新潟医学校に関する規則

谷津三雄

中野操著増補『日本医事大年表』（昭和四十七年十二月刊）の明治三年（一八七〇）の日本医事によると「新潟ニ於テ地方有志協力ノ下ニ共立病院ヲ興シ、次デ第一区協定病院ト称シ医学生ヲ養成シ、九年県立病院トナリ、十二年新潟医学校ト改称ス、之レ今日ノ新潟医科大学ノ前身トス」と記載され、また明治六年（一八七三）の日本医事に「是歳新潟ニ仮病院ヲ設立シ白井剛作ヲ病監トシ仏人ウキーターヲ医学教師トシテ患者診療ノ傍ラ医学生ヲ教育セシム、十一年新潟医学校ト改称ス、之ヲ新潟医科大学ノ濫觴トス」と記載されており明治十一年と同十二年の両年がみられる。

また、蒲原宏、本間邦則共著『新潟市の医学、歯学史散策』の「新潟病院及び医学教場跡」の項目に「明治六年（一八七三）県令、楠本正隆は新潟町、鈴木長蔵を中心と